文化論集第25号
2004年 9 月

アンセルムスと十字軍

矢 内 義 顕

序

1071年，イスラーム勢力であるトルコ系セルジューク人によってビザンツ帝国の軍隊が撃破され，1076年には聖地エルサレムも占拠される。エルサレムから帰還した巡礼者たちは，征服者による嫌がらせと妨害の次第を報告する。さらに，ビザンツ皇帝アレクシオス１世コムネノス（在位1081-1118年）もローマ教皇ウルバヌス２世（在位1088-99年）に救援を求める。これに応じ，教皇はクレルモン公会議（1095年）において，ムスリムの手から聖墳墓を奪回することを宣言する。この呼びかけに呼応した人々は，「神がそれを望んでおられる」（Deus lo vult）と叫びながら武器を携える。こうして開始された第一回十字軍（1096-99年）は，エルサレムの奪還，エルサレム王国の建設という華々しい軍事的な成果を挙げる。

本稿では，11世紀における最も偉大な神学者カンタベリーのアンセルムス（Anselmus Cantuariensis 1033/34-1109年）の『書簡』を取り上げ(1)，彼がこの十字軍に対してどのような態度をとったかを明らかにする(2)。

1．アンセルムスとエルサレム十字軍

最初に取り上げるのは，クレルモン公会議に先立つ９年前の1086年に執筆された『書簡117』である。これは，一度は，ベックの修道士になることを志したものの，コンスタンティノープル防衛のために聖地エルサレムに赴いた自分の兄弟に刺激され，自らもエルサレムに行こうとするイタリア人貴族ヴィレルムス（Willelmus）に宛てた書簡である。その中でアンセルムスは次のように述べている。

「私は，最愛の貴君に，忠告し，勧告し，切願し，命じます。どうか，かの地エルサレムに行こうとする願いは棄てて下さい。今そこにあるのは，平和の観想ではなく，苦難の光景です。血に染まった手に汚されたコンスタンティノープルとバビロンの宝は放棄しなさい。そして天上のエルサレムへの道を歩み始めなさい。これこそが平和の観想であり，そこで，貴君は，この世の宝を軽蔑する者だけが手にすることのできる宝を見出すことでしょう」[(3)]。

エルサレムへの巡礼熱が高まり始めたのは，10世紀の中頃である。アンセルムスのいたベック修道院のあるノルマンディ地方でも，ノルマン人たちが次々と聖地巡礼に赴く。アンセルムスの無二の親友であったゴンドルフス（Gundulfus）も，その若き日に（1057年頃）エルサレムに巡礼し，その帰途に修道士となる決意を固めたことが，彼の伝記によって知られる[(4)]。したがって，本書簡が執筆される以前から，聖地に関する情報は，そこから帰還した人々によってアンセルムスの耳に入っていたと思われる。この書簡が執筆された頃のエルサレムの不穏な空気についても，またビザンツ帝国におけるノルマン人の軍事的な活動についても，同様であろう。

彼は，この書簡で，現実の聖地エルサレムには血塗られた欲望による争い，「苦難の光景」（visio tribulationis）しかなく，「平和の観想」（visio pacis），つまり「神の観想」はないと言う。それゆえ，天上のエルサレムへの道（修道生

活）を歩み，「平和の観想」を求めるようにと忠告する。ここには，彼の終末論的な修道観が端的に示され[5]，軍事的な行動に対する厳しい批判がなされている。

次に取り上げるのは，クレルモン公会議後（1096年）に書かれた『書簡195』である。公会議後，隠修士ペトルスが十字軍勧誘のために北フランスの各地を遊説する。あるいは，その影響かもしれないが[6]，イングランドにおいても，セーン（Cerne）の修道院長が修道士たちを扇動し，すでに若い献身者を出立させ，さらには彼自身も船を購入し，エルサレム行きを企てているとの報告がカンタベリー大司教アンセルムスの下に届く。アンセルムスはこの件に関して，ソールズベリの司教オズムンドゥス（Osmundus）に調査を命じる書簡を送り，その最後にこう記す。

「また，貴兄の司教区にあるすべての修道院に，いかなる修道士もエルサレムへの旅を企ててはならないこと，それは破門の罰によって禁じられていることを告知して下さい。さらに，王とわれわれを代表して，エクセターの司教，バースの司教，ウスターの司教にも，彼らの司教区内でこうした行動が禁じられていることを通告して下さい。使徒座もこれを禁じているからです」[7]。

クレルモン公会議が修道士の十字軍参加を禁じているにもかかわらず，修道士の中にも参加を望む者たち，それを煽る者たちがいた。これに対し，アンセルムスは断固たる処置で臨もうとする。本書簡で示された彼の見解は，この約10年後（1106-7年），彼の晩年に書かれた『書簡410』においてより詳しく説明される。これは，サン＝マルタン・セ（Sanit-Martin de Séez）の修道士Pに宛てられたものである。

「私の最愛の友よ，貴君がエルサレム行きを望んでいることを聞きました。そこで，まず，私が貴君に言うことは，貴君のこの望みが，健全な精神から発するものではなく，貴君の魂の救いに益することはないということです。というのも，これが貴君の誓願に反しているからです。この誓願によって，貴君は，

神の前で修道院における定住を約束し，そこで修道服を受領したからです。さらに，これは使徒座への服従にも反しています。使徒座は，その大いなる権威をもって，修道士がこの旅を企ててはならないと命じています。ただし，神の教会を治め，人々を教化するために役立つことのできる聖職者は例外ですが，この場合も上長の助言と，上長への服従なしには許可されません。私は，使徒座がこの命令を宣言した時，そこに陪席していました。さらに，これは貴君の修道院長への服従にも反することです。彼の意志はこれを憎み，貴君の魂の危険であるかのように呪っているからです」[8]。

本書簡は，末尾からも推察されるとおり，エルサレム行きを熱望する一修道士（Pとだけ記されている）に手を焼いた修道院長が，アンセルムスに説得を依頼し，それに応えて執筆されたものと思われる。ここでアンセルムスは，三つの理由を挙げ，この修道士にエルサレム行きを思い止まらせようとする。

第一は，このエルサレム行きが修道誓願の項目の一つである定住（stabilitas loci）に反するという点である。ベネディクトゥスの『戒律』は，第58章で「（修道院に新たに）受け入れられる者は，祈祷所において，全員の前で定住と修道生活と服従を約束する。これは神と聖人の前で行なわれるので，後日，これに背くことがあるならば，神を侮辱する者として神から断罪されることを知らねばならない」[9]と規定し，さらにこの誓願を終えた後，「（彼は）祈祷所においてただちに自分の身に付けている衣服を脱ぎ，修道院の衣服を身にまとう」[10]と定める。アンセルムスが簡潔に述べるとおり，修道士Pの希望は『戒律』の規定に背くことに他ならない。さらに，この点に関連して，アンセルムスが30年以上も前（1072-73年頃）にクリュニー修道院の修練士ランゾー（Lanzo 1107年歿）に宛てた『書簡37』にも触れておく必要があろう[11]。この中で，彼は，ランゾーに，修道生活を始めるにあたり，何よりも「心の安らぎ」（quies mentis）を守り，共住修道士として生涯一つの修道院に留まるように強く勧める。「心の安らぎ」とは，『戒律』における「定住」をより霊的・内面的に言い表したも

のに他ならない。この書簡が執筆されてから30年後，アンセルムスは，カンタベリーの修練士ヴァルネルス（Warnerus 1138年歿）に宛てた『書簡335』においてこれに触れ，「ランゾー師がまだ修練士であったときに，私が彼に書いた書簡を，貴君が探すように勧めます。そうすれば，修道生活を始めるにあたって貴君がどのように振舞わなければならないか，また修練士を襲う誘惑にどのように対処しなければならないかを，そこに見出すでしょう」[12]と記す。『書簡37』に示されたアンセルムスの修道観は，彼の修道生活全体を貫いており，エルサレム行きを望む修道士に宛てた晩年の書簡にも，それが表明されていると言うことができよう。

第二は，このエルサレム巡礼が使徒座（教皇庁）の指示に反するということである。この点は，すでに『書簡195』においても述べられているように，クレルモン公会議（11月27日）において出された禁令である[13]。公会議は，聖職者，修道士に対しては，直属の上長の許可がなければ，十字軍に参加してはならないことを命じ，また世俗の人々の場合でも，聖職者の意見を聞かずに参加することはできず，また若い夫は妻の同意が必要であった。本書簡においても，同様のことが述べられている。むろん，ここにもあるとおり，「上長」の許可がある場合には，聖職者・修道士もエルサレムに行くことができた。事実，アンセルムスの身近にもそうした聖職者がいた。彼の友人であるリヨン大司教フーゴー（Hugo 在任1083-1106年）である。彼は，1100年の秋，教皇パスカリス２世（在位1099-1118年）にエルサレム巡礼を願い出て許可され，かの地で数年を過ごし，帰還する。その帰国をアンセルムスに伝える書簡が残されており，またフーゴーへの返信である『書簡261』（1103年）において，アンセルムスは「喜びをもって神に感謝し，また感謝をもって喜びます。私たちの救いが達成されたかの地を訪問したいとの貴兄の望みが，神の憐れみによって満たされ，また私たちは貴兄の帰還と貴兄の健康の回復を喜んだからです」とフーゴーが無事に帰国したことに喜びと感謝を述べている[14]。

ところで，上記の『書簡410』において，アンセルムスは「私は，使徒座がこの命令を宣言した時，そこに陪席していました」と述べているが，これはクレルモン公会議のことではなく，1098年10月パリ教会会議ないし翌年４月のローマ教会会議のことを指しているのであろう。ここでは，新たに命令が発布されたわけではなく，おそらく，クレルモン公会議の決定が口頭で確認されたのだと思われる。

第三は，この修道士の希望が，修道院長の意志に反するということである。ベネディクトゥスの『戒律』は修道院長を「キリストの代理」(vices Christi) とみなし[15]，修道院長への服従を説く[16]。すでに述べたように，この修道士の修道院長は，彼の企てに対し反対をしている。彼は修道院長の意志に従わなければならないのである。

以上，修道士のエルサレム巡礼ないし十字軍参加に対するアンセルムスの見解を，三通の書簡を通して見てきた。彼は，修道士としての定住の義務，上長および公会議決定への服従という点から，これに反対するのである。

２．アンセルムスとレコンキスタ

これまで述べてきたエルサレム十字軍とならんで，この時代には，もう一つの十字軍があったことを忘れてはならない。８世紀以降，イスラームの支配下にあったイベリア半島において，着々と進行していたレコンキスタ（Reconquista 国土回復運動）がそれである[17]。1064年，教皇アレクサンデル２世（在位1061-73年）は，スペイン北部のイスラーム勢力を駆逐すべく，呼びかけを行なう。このバルバストロス遠征は，教会がその志願兵に免償の特権を与えたという点では，むしろ，最初の十字軍とも言うべきものであった。さらに，1085年，レオン・カスティーリャ王アルフォンソ６世（1065-1109年）は，イスラーム支配下のトレドを陥落させ，キリスト教圏に組み込むことに成功する。これに対し，北アフリカのベルベル系王朝であるムラービト朝がイベリア半島に進出

し，アンダルスを支配下に置く。こうして，北部のキリスト教地域と南部のイスラーム地域との対立が激化する。こうした戦いには，ブルゴーニュ，シャンパーニュ，ノルマンディ，そしてイングランド，ラインラント，オーストリアからも兵士が参加した。「友情，自衛，戦利品欲，キリスト教的連帯，免償獲得がスペインの十字軍に参加する動機のすべてであった」[18]。

この時代，レコンキスタを象徴する巡礼地として発展するのが，スペイン北西部ガリシア地方にあるサンティアゴ・デ・コンポステラ（Santiago de Compostela）である。ナバーラ王サンチョ（在位1000-35年）などの王たちが，巡礼地までの道路，橋，宿泊所などを改善し，整備したこともあり，サンティアゴへの巡礼者は，11世紀以降，着実に増加していった。上述のリヨン大司教フーゴーも1095年，ここに巡礼し[19]，レコンキスタに関する情報を持ち帰る。それゆえ，アンセルムスもイベリア半島の情勢についてはまったく知らなかったわけではない。次に取り上げる二通は，これに関連するものである。

最初に取り上げるのは，1097年に修道士リカルドゥス（Ricardus）に宛てた『書簡188』である。この修道士について，シュミットは「カンタベリーの修道士であったと思われる」と注記しているが，この書簡が書かれた時には，別の修道院に移っているようである。彼は，修道士となる以前，重い病気にかかり，病気が癒えたら聖エギディウス（Sanctus Egidius）教会へ巡礼に行く誓いを立てる。しかし，それを果たすことができずに思い悩んでいる。彼の修道院長からそのことを聞いたアンセルムスは書簡を送る。

「この件について，貴君は，できるだけ貴君の修道院長を信頼しなければなりません。貴君は，貴君の魂を彼の助言と指示に委ねたのですから。…そこで，私は，貴君に助言し，命じます。上に述べた巡礼の企てとあの誓いに関する心配をすべて放棄し，貴君が志した生活に，心を静め，動揺することなく留まりなさい。そして静穏の内に，貴君が志した事柄，すなわち，服従，貴君の罪のための悔悛，他の善い振る舞いを達成するように努めなさい。修道士となる誓

願によって，貴君自身のすべてを神に捧げ，神に返したとき，どんな行動であれ，それ以前に貴君が約束したささいな誓いはすべて果たされたことを，貴君は確信すべきです。それらは，誓うべき事柄でも信仰の義務でもないからです。それゆえ，静穏で落ち着いていなさい。そして，私は，神の恩恵により貴君の上に私がもっている権威によって，貴君をあの誓いから解き放ちます」[20]。

サンティアゴへの巡礼には四つの経路があるが，聖エギディウス教会，すなわち，サン＝ジル（St. Giles）は，それらの一つの最初に位置する教会である。12世紀半ばに編纂された『聖ヤコブの書』（Liber Sancti Jacobi）の第五巻『巡礼案内』において「この上なく聖なる教会堂」（sanctissima basilica）と記されているサン＝ジルの礼拝堂は，この書簡が執筆された前年に，教皇ウルバヌス２世により聖別されたばかりである[21]。

本書簡においても，アンセルムスは，上述の『書簡37』『書簡410』と同様に，修道院長への信頼と服従，心の静穏と落ち着き（quietus et securus）を説き，自分の修道院に留まって修道生活に励むように勧める。さらに，修道誓願は，修道士となる以前の誓いに優ると述べ，大司教の権威により，この修道士をかつての誓いの束縛から解放する。修道士リカルドゥスがサン＝ジルへの巡礼だけを望んだのか，それとも，そこから出発してサンティアゴを目指そうとしたのかは，この書簡からは明らかではない。しかし，彼らがサンティアゴ巡礼への熱気が高まりつつある時代にいたことは確かである。

次に取り上げる『書簡263』は，1101-1103年に，サンティアゴ司教ディアコヌス（Diaconus 1140年歿）宛てに執筆されたもので，直接レコンキスタに関係する。

「私たちキリスト教徒は，常に喜びと悲しみを分かち合うべきですが，順境がキリスト教の高揚につながり，逆境がその謙遜につながることを認めるなら，今がまさにその時です。というのも，私どもは貴兄の恐怖と苦悩の理由を貴兄の書簡から窺い知り，貴兄が恐れるものを，私どもも恐れ，貴兄が苦悩するこ

とについて，私どもも苦悩するからです。

貴兄は，サラセン人に対抗するために私どもの援軍が召集されることを切望しておられるのですから，事情が許すならば，喜んで私どもの軍隊を招集し，キリスト教徒の援助のために派遣するでしょう。しかし，貴兄の聖性がご存じのように，イングランド王国は，至るところで内乱が生じ，日々その知らせに混乱しております。それゆえ，私どもとしても，貴兄にあまりお役に立てないのではないかと，大いに危惧いたします。というのも，私たちに敵対する者たちの妨害を恐れるからです。そもそも，自分自身の所有を守ろうと腐心するものは誰でも，共有するものにまで配慮をすることができないものです。しかし，神の同意によって，このことを敬虔に祈るよう努めることにします…」[22]。

文面にもあるとおり，本書簡は，イスラーム（サラセン人）に対抗するための援軍を要請する書簡に対する返信である。この時期，上述のアルフォンソ6世とムラービト朝との戦いは激化していた。しかし，1097年，コンスエグラ付近でのアルフォンソの敗戦，1100年，マラゴン付近での義理の息子アムー伯レーモンの敗戦など[23]，キリスト教側にとって事態は危機的であった。こうした中で，コンポステラ司教は，援軍の派遣に関して，イングランド王への執り成しを依頼する書簡を，カンタベリー大司教アンセルムスに送ったのだと思われる。

アンセルムスは，この書簡を通して，イベリア半島におけるキリスト教（Christianitas）が危機に直面していることを知り，その恐怖と苦悩に共感と連帯を表明する。しかし，援軍を送ることについては，承諾しない。むろん，これは彼個人の見解ではなく，宮廷の意向であろう。この時期，イングランドも決して安定した情勢ではなかった[24]。1100年8月，ウィリアム2世（在位1087-1100年）の急死後，ただちにクーデターによって王に即位したヘンリー1世（在位1100-35年）にとって，脅威となったのが兄のノルマンディ公ロベール（Robert）である。ヘンリーの即位当時，十字軍に参加していたロベールは，帰

国後，すぐにイングランド征服を企て，1101年にはイングランドを襲うが，この時はヘンリーに撃退される。その後，王位の継承をめぐるこの対立は，諸侯をも巻き込み，1106年タンシブレでヘンリーがロベールを打ち破り，ノルマンディを征服するまで続く。宮廷がイベリア半島への派兵に関して，承諾の回答を与えなかったのも当然のことである。

ところで，本書簡において，サラセン人（Saraceni）という言葉が登場するが[25]，彼の全著作・書簡を通じて，この言葉が用いられるのはこの一個所だけである。この点に関連し，アンセルムスとムスリムとの出会いについて触れておくことにする。

1098年10月から1100年９月までアンセルムスは，イングランドを離れ，リヨン，ローマなどを転々とする。この間，1098年には，イタリア南部のカプーア近郊リベリで一夏を過ごし，彼の神学的主著『神はなぜ人間となったか』（Cur deus homo）を完成する。彼の弟子エアドメルスは，『アンセルムス伝』において，この地でアンセルムスが異教徒（pagani）と接触したことを報告している。それは，次の一節である。

「アンセルムスの人間性は，分け隔てなくすべての人を受け入れていた。すべての人とは誰か。キリスト教徒については言うまでもないが，異教徒もそこに含まれる。実際，（カプーアには）ロゲリウスの家臣シチリア伯が遠征に引き連れてきた数千人の異教徒がいたのである。彼らの中の少なからぬ人々は―私は言うが―アンセルムスが親切であるという評判に惹き付けられ，しばしば，われわれが滞在している所にやって来た。そして，アンセルムスから喜んで肉の糧を受け取り，戻ると，彼らが体験したこの人の賛嘆すべき好意を仲間たちに語ったのである。そのため，この時から，アンセルムスは彼らの間で非常に尊敬され，われわれが彼らの陣営を通り抜けると―彼らは一箇所に宿営していた―大勢の人々が天に向かって両手を挙げ，彼に祝福を願い，彼らの慣わしに従って手で接吻を投げかけ，さらには彼の前に跪いて，彼の慈しみ深い寛大さ

に感謝しつつ敬意を表したのである。さらに，私たちが把握したところでは，彼らは，アンセルムスの語る教えにも喜んで従っただろうし，彼をとおしてキリスト教信仰のくびきにつながれもしただろうが，彼らの伯爵がこのことに対して凶暴なまでに厳格であることを恐れていた。というのも，実際，伯爵は，彼らの内の誰かがキリスト教徒となることを許そうとはせず，それを罰したからである」[26]。

当時，カプーアはアプーリア公ロゲリウス・ボルサ（在位 1085-1111年）によって包囲されていたが，その陣中には彼の叔父であるシチリア伯ロゲリウス（在位1072-1101年）も軍勢を引き連れて参戦していた。このシチリア伯の宮廷と軍隊には多くのムスリムが働いていたことが知られている[27]。エアドメルスの報告にある「異教徒」とはこの人々である。彼の報告には，多少とも誇張があるかもしれない。しかし，アンセルムスが「異教徒」すなわち，サラセン人と出会ったことは確かである。そして，このことが，上述の『神はなぜ人間となったか』に何らかの影響を与えた可能性がある。

本書は，人間の救いのために，なぜ神が人間となり，十字架にかかって死なければならなかったかを，聖書や教会教父たちの著作，つまり権威（auctoritas）によらず，「理性のみで」（sola ratione）論証する対話形式の著作である。本書が執筆された理由には，「信じている事柄を知性と観想によって喜ぶため」だけでなく，新約聖書の「ペトロの手紙一」３章15節「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には，いつでも弁明できるように備えていなさい」という言葉が引用されているとおり，護教論的な意図も含まれている[28]。すなわち，神の受肉，十字架の死による贖罪というキリスト教信仰の単純さを愚弄する不信仰者（infideles）に対して，その理性的な根拠と必然性を提示することである[29]。

ここで言及される「不信仰者」とは具体的に誰を指すのであろうか。アンセルムスは，本書の最後で，それまでなされてきたすべての論証は，「ユダヤ人」

（Judaei）のみならず，「異教徒」（pagani）をも満足させるものであると述べる[30]。冒頭の「不信仰者」が「ユダヤ人」「異教徒」と明確化されるのである。上述のとおり，エアドメルスの報告にある「異教徒」とはムスリムに他ならない。だとするならば，『神はなぜ人間となったか』の末尾の「異教徒」もムスリムを指す可能性は十分にある[31]。彼らとの遭遇が，この一語を付け加えさせたのではないだろうか。

むろん，こうした経験を通して，アンセルムスが宗教としてのイスラームに関して何らかの知識を得たということではない。確かに，上述の『書簡263』において，彼は「サラセン人」という語を使用はしているが，その情報に関しては，当時の知識人が有していた以上のものではないであろう[32]。何よりも，この書簡において，イスラームはキリスト教世界を脅かす軍事的な勢力とみなされており，宗教として理解されてはいない[33]。

3．義弟ブルグンディウスの十字軍参加

上述の『書簡263』の次に収録されている『書簡264』は，これまで取り上げてきた書簡のいずれとも異なるが，しかし，アンセルムスと十字軍を考える場合，触れないわけにはいかない。それは，アンセルムスの実の妹リケザ（Riceza）とその夫ブルグンディウス（Burgundius）に宛てた書簡である。年齢は離れていたが，彼女はアンセルムスにとって唯一の肉親であった[34]。リケザとブルグンディウスの間には何人かの子供が生まれたが，みな早世し，無事に育ったのは一人の息子だけである。彼らは，その子を伯父と同様アンセルムス（1148年歿）と名づけ，修道士として神に捧げる。1099-1100年，アンセルムスのもとにブルグンディウスから書簡が届く。彼は，十字軍への参加を望んでおり，その許可をアンセルムスと自分の息子に願っていた。この返信が『書簡264』である。

「…主であり最愛の友であるブルグンディウスよ，貴兄は，神への奉仕と貴兄

の魂の救いのためにエルサレムに赴こうとしていること，またこれに関して私の許しと貴兄のご子息，私の甥アンセルムスの許しを得たい，との旨を私に書き送ってきました。私は，貴兄の立派な意向を喜ぶとともに，旅立つにあたって次のようなことを助言し，また願います。どうか，かつて犯した罪を背負ったままで旅に出ることのないように，家に罪を残すことがないようにできるだけ努め，さらに，貴兄の身分における真のキリスト者として正しく生きる意志を保持して下さい。貴兄が子供の頃から犯した罪を，思い出しうるかぎり，一つ一つ告解して下さい。貴兄の妻に関して，罪を残すことがないように注意して下さい。彼女の善良さについては，私よりも貴兄の方がよくご存じです。しかし，神が貴兄をどのようになさろうとも，後に残された彼女が，生きているかぎり，援助と助言に欠くことがないように，また彼女の意志に反して貴兄の栄誉ある家から追い出されることがないように取り計らって下さい。そうすれば，彼女は，貴兄の体と魂の救いのために，そして彼女の魂と貴兄の亡き子らの魂のために神に仕えることができるでしょう。もし，貴兄が遠からず死を迎え，全生涯の決算を神にお支払いすることになると思っているのでしたら，貴兄がなさりたいように，貴兄の全財産を整理して下さい。貴兄は私たちの許可を願っておられます。貴兄がどこにいても，常に，すべてのことにおいて，神の許しと援助と加護を神に祈ります。

さて，私の最愛の妹よ，お前のすべての意向とすべての生活を神への奉仕へと向けなさい。神がこの世の生活におけるすべての喜びをお前から奪われたことは，お前が神のみに喜びを見出せるようにと，神がなさったことだと信じなさい。いつでも，どこでも，神を愛し，神を希求し，神を思い巡らしなさい。全能の神があなた方二人を祝福して下さるように」[35]。

これまで取り上げてきた書簡と本書簡と比較した時，十字軍参加に対するアンセルムスの態度が，一変していることに驚かされる。彼は，義弟の十字軍参加に賛意を表し，旅立つにあたって，霊的な事柄，そして身辺の整理に関して

なすべき事柄を忠告する。

この態度の相違の理由を，世俗的な事柄に関するアンセルムスの無関心に求める研究者もいる[36]。しかし，単にそれだけではないように思われる。ここで注目したいのは，「貴兄の身分における真のキリスト者として」（sicut verus Christianus vestri ordinis）という表現である。ブルグンディウスが，実際にどのような身分（ordo）であったかは正確には分からない。しかし，アンセルムスと妹リケザが斜陽化した貴族の家柄に属していたことを考えるならば，ブルグンディウスもまた，決して裕福ではないが，貴族ないし騎士の階級に属していたと思われる。他方，アンセルムスが十字軍に参加することを反対した人々の身分は，修道士を志す若者，そして修道士たちであった。彼の態度の相違を解く鍵はこの ordo という語にあると思われる。

中世において ordo という語が持つ意味は多様である。ここでは，次のように理解しておこう。「《ordo》というラテン語は，各人がそれぞれ自分の歩調で復活と救済のほうへと歩いてゆくために配属されたいくつかの集団の不変性を意味していた」[37]。つまり，ordo という言葉は，単に社会的な階層を示すだけでなく，救済を目指すさまざまな集団を示しているのである。それぞれの身分に属する者は，それぞれの身分にふさわしい働きをし，またそれぞれの身分にふさわしい仕方で救済を求めなければならないのである。そうであるならば，修道士は祈りと観想の生活において，天上のエルサレムを求めることがその本分であり，軍事的な行動に参加することは，彼の身分にはふさわしくない。他方，王や騎士は戦いと統治が義務であり，その義務を遂行する中で，同時に救済を求めなければならないのである。もちろん，ここで，９世紀に登場し，11世紀から再び語られるようになる「祈る人」（oratores）「戦う人」（bellatores）「働く人」（laboratores）という三区分を適用することは安易かもしれない[38]。しかし，これまで取り上げてきた書簡において，十字軍への参加に同意するにせよ，反対するにせよ，書簡を送った相手がいかなる身分であるかは，アンセルムス

にとって重要なことであった。

これとの関係で，アンセルムスが初代のエルサレム王ボードワン１世（Baudouin, Baldewinus 在位1100-1118年）に送った書簡についても述べておこう。一通は1102年に書かれた『書簡235』，もう一通は1104/5年頃に書かれた『書簡324』であるが，ここでは，前者を引用する。

「神がその賜物によって讃えられ，そのすべての御業において聖とされますように。この神が，恵みにより，かの地において，陛下を王位へと挙げられました。この地に，私たちの主イエス・キリストご自身が，キリスト教の最初の種をご自分で播かれ，そこから全世界に広がるようにと，新たに教会の苗木を植えられました。この地の教会は，人間の罪のゆえに，神の裁定から，長らく不信仰者たちによって虐げられていましたが，神の憐れみは，私たちの時代に，驚くべき仕方でそれを立て直して下さいました。さて，陛下の父上と母上またそのご子息たちが，この私に示して下さった大きな愛とご好意を思い起こしますと，陛下の兄上，そして陛下をこの位に選ぶことによって示された神の恵みについて，どれほど私が喜んでいるか，また兄上の跡を継いだ陛下が，ご自分のためではなく神のために，統治に励まれることを熱望する私の気持ちがどれほどであるかは，この書簡によって言い表すことができません。

それゆえ，私の最愛の主よ，たとえ陛下が私の勧めを必要とはなさらなくとも，溢れんばかりの心から，最も忠実な友として，私は，陛下に願い，勧め，懇願し，神に祈ります。どうか，神の法のもとに生きることにより，すべてにおいて陛下の意志を神の意志に従わせるようになさって下さい。というのも，もし神の意志に従って統治なさるのであれば，真に陛下の益のために統治なさることになるからです。多くの邪悪な王たちが行なったように，神の教会が，陛下をいわば主人とし，陛下に奉仕するために与えられているものとお考えにならず，陛下を弁護者そして擁護者として，陛下に委託されているものとお考え下さい。神がこの世において何よりも愛しておられるのは教会の自由です。

教会に役立とうとするのではなく，支配しようとする者が，神に敵対していることは明白です。…この新たな復興の時にあたり，陛下が，その王国においてどのように教会を設立なさるか次第で，将来の世代の人々は，末長く教会を支え，それに仕えることになるでしょう。私が陛下に説き勧めようと望み，全能の神に祈っておりますことは，神ご自身が，陛下を説き勧め，神の戒めに従う道に導き（詩118 [119]: 35），そして天上の王国の栄光へと導いて下さることです。アーメン」[39]。

1099年７月，ゴドフロワ・ド・ブイヨンを司令官とする十字軍はエルサレムを占領する。占領後，彼は「聖墓の守護者」の地位につくが，翌年病没し，彼の弟であるボードワンが初代のエルサレム王に即位する。本書簡で「陛下の兄上の跡を継いで」とあるのは，この次第を述べているのである。アンセルムスは，このエルサレム王の即位を喜び，敬意を表す書簡を送った。ゴドフロワとボードワンの父母はブーローニュ伯とその妻イダであり，後者はアンセルムスがベックの副修道院長時代からの文通相手であった[40]。この交誼が，本書簡を執筆した主な理由であろう。

本書簡の前半で，アンセルムスは，長い間「不信仰者」（infideles）の手によって虐げられていた，キリスト教および教会の発祥の地エルサレムが奪還され，ボードワンが王として即位したことに喜びを表明する。アンセルムスは絶対的な非戦論者ではない。それどころか，彼にとってこれは正当な行為である。上述の『神はなぜ人間となったか』において，「報復を行なうことは，万物の主である神以外には，いかなるものにも属さない（ロマ12:19）。そこで，地上の権力が正当な報復を実行する場合，それは神自身が行なっているのであって，地上の権力はこの目的のために神によって任命されているのである」[41]と述べられており，本書簡の内容を，神学的に説明していると言うことができよう。

書簡の後半は，王の統治，特に教会に対する王の統治のあり方に関する勧告である。王は，「教会の自由」（libertas ecclesiae）の弁護者，擁護者として，

教会のために役立つように[42]，神の意志に従って統治しなければならないと述べる。「教会の自由」という概念については，それがグレゴリウス改革の標語であるということだけを指摘しておこう[43]。そして，書簡の最後で，アンセルムスは，神の意志に従って地上のエルサレムを統治することによって，王が天上のエルサレムの栄光へと導かれることを願う。王もまた，その身分・地位に課せられた義務を遂行する中で，天上のエルサレムを目指す努力を怠ってはならないのである。

再び『書簡264』に戻ることにする。上述のように，ブルグンディウスは世俗の人間であり，おそらくは騎士階級に属していた。彼には彼の義務があり，またその義務を遂行する中で，彼は自らの救いを求めなければならない。事実，アンセルムスの書簡は，ブルグンディウスが「神への奉仕と魂の救いのためにエルサレムに赴こうとしている」[44]ことを記している。クレルモン公会議は，十字軍の参加者に罪の免償を与え，来世での報酬を約束した。ブルグンディウスが選択したのはこの道であった。そしてアンセルムスの側にも，それを止める理由はなかったのである。

本書簡の最後の数行は，妹リケザ個人に向けられている。義弟ブルグンディウスに対して語る際，アンセルムスは「君」(tu) ではなく丁寧語 (polite plural) である「貴兄」(vos) を用いるが，リケザには，兄として「お前」(tu) を用いる。そして，悲しみに満ちた彼女の人生が簡潔に語られる。「神がこの世の生活におけるすべての喜びをお前から奪われた」。上述のように，彼女の子供は一人を除いて早世し，無事に育った一人は修道士として神に捧げられた。母としての喜びは奪い去られている。後は夫とともに暮らし，寄り添って立っていた老木がどちらからともなく倒れるように，死を迎える，そのような人生もあったはずである。しかし，その夫も，死を覚悟の上で，エルサレムに旅立とうとする。妻としての喜びも奪い去られようとしている。今日よりもはるかに死が身近な時代ではあった。しかし，愛する者を失う悲しみに変わりはなかろう。ア

ンセルムスは，すべてを神の意志として受け入れ，「神のみに喜びを見出すように」と言う。そして，ブルグンディウスが生きて帰ることはなかった。兄は，一人残された妹のために，女子修道院を世話しようとするが，うまくいかない。彼女のその後の消息は分からない。

この最後の数行は，確かに，兄としてのアンセルムスが唯一の妹に語りかける個人的な書簡のように思われる。だが，アンセルムスの書簡のすべてが，公開を前提としていることを考慮するならば，これらの数行は，同時代の，同じ境遇にいた多くの女性たちに向かって語りかけられているとも考えられる。上述のブーローニュ伯とその妻イダは息子の一人をエルサレムで失う。むろん，こうしたことは，王侯貴族の女性たちに限られたことではない。S. ヴォーンは，ブルグンディウスがエルサレムに旅立つにあたって，アンセルムスが与えた助言は，同じようにエルサレムへ向かった「彼の霊的な姉妹たちのすべての夫たちに与えられた助言の模範ではないだろうか」と指摘するが[45]，だとするならば，リケザに語られた言葉は，残された母そして妻たちに向けられた助言の模範とみなすこともできよう。

結　語

これまで述べてきたことから明らかなように，十字軍参加を希望する人々に対するアンセルムスの対応は，それぞれの人がどの身分に属しているかによって異なっていた。修道士と修道士を志願する者に対して，彼は，『戒律』の命じる定住および修道院長への服従の義務そして公会議の決定という点から，エルサレム行きを許可しない。彼らは，修道生活において，天上のエルサレムを希求しなければならないのである。しかし，王侯貴族を始めとする世俗の人々に対して，彼は十字軍参加を思い止まらせようとはしない。彼らはその身分に課せられた統治あるいは戦いの義務を遂行する中で，自己自身の魂の救い，天上のエルサレムを希求しなければならないのである。そして，彼らの後に残さ

れた母親ないし妻たちもまた，彼女たちの置かれた境遇において天上のエルサレムを希求しなければならない。ここに，アンセルムスの思想がもつ終末論的な希求が反映している。

それと同時に，ここには，彼の思想の中心的な概念である「直(ただ)しさ」（rectitudo）の具体的な適用を見出すことができる。『神はなぜ人間となったか』において，彼は次のように述べている。「理性的な被造物の意志はすべて神の意志に服さねばならない。…これが天使と人が神に負う負債・義務であり，それを支払えば，何人も罪を犯さず，それを支払わないものは誰でも罪を犯す。これが正義あるいは意志の直しさであり，人を義人あるいは心の真っ直ぐな人，すなわち，意志の真っ直ぐな人にする（詩35［36］: 11）」[46]。すべての理性的な被造物は，神の意志によって定められた秩序（ordo）に置かれており，その中で，彼らは各々に課せられた義務（debitum）を遂行しなければならない。それは，神の意志に自らの意志を従わせることであり，神への負債を返却すること，罪を犯さないことである。それぞれの置かれた身分（ordo）において，それぞれの生き方で，天上のエルサレムを希求することは，アンセルムスにとって「正義」（iustitia）すなわち「意志の直しさ」（rectitudo voluntatis）の遂行に他ならないのである。それゆえ，現実の問題としては，エルサレムへの軍事的な侵攻・防衛の肯定という立場が生じる。

しかし，アンセルムスの思想が，これだけに留まらないことを最後に述べておこう。上述のように『神はなぜ人間となったか』は，アンセルムスと彼の弟子ボゾ（Boso）との対話形式をとった著作である。この中で，ボゾの役割は，不信仰者の立場に立ち，キリストの贖罪に関するキリスト教信仰を批判し，またアンセルムスに応答することである。キリスト者は信じている事柄の説明を求め，不信仰者はそれを信じようとしないがゆえに，キリスト者によって信じられている事柄の説明を求める。しかし，この点において両者は同じことを求めている[47]。それゆえ，この前提に立って，アンセルムスは，後者を理性的な

対話に参加させるのである。本稿の冒頭で取り上げた彼の書簡に，「平和の観想」という言葉が用いられていたが，本書も，一方では「信じている事柄を知性と観想によって喜ぶ」ことを目的として執筆されていることは上述のとおりである。そして，この「観想」（contemplatio）は対話という場において，他者に開かれたものとなる。さらに，この対話が理性によってなされる以上，そこにはキリスト教信仰をもたない者も参加することが可能となるのである。十字軍による武力攻撃が最高潮に達している最中に，こうした理性による対話の可能性が提示されていることは，注目してよいであろう。

むろん，今日のような宗教間の対話，つまり，諸宗教の相互理解という意味での対話をアンセルムスに要求することは，時代錯誤であろう。彼が目的とした対話は，自らのキリスト教信仰の立場を，理性によって明らかにする対話，護教論的な対話である。ここに異教徒の改宗という宣教的な目的が含まれていたか否かは定かではない。少なくとも，アンセルムスは，彼の論証がユダヤ人と異教徒を満足させるであろうと確信していたことは，上述のとおりである。そう確信するには，他宗教の立場についての情報，理解が不可欠である。しかし，ユダヤ教はともかくとしても，宗教としてのイスラームに関する正確な情報が，彼には決定的に不足していた。それが西欧世界に入って来るのは，彼の死後のことだからである[48]。

注(1) 以下，アンセルムスのテキストは，S. Anselmi Cantuariensis archiepiscopi *Opera omnia* Tomus I-II., Ad fidem codicium recensuit Salesius Schmitt, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1968による。

(2) アンセルムスと十字軍については，すでに，古田暁「十一世紀の二通の書簡」（『図書』1979，7，pp. 18-24）；R. W. サザーン『中世の形成』森岡敬一郎・池上忠弘（みすず書房 1978年）pp. 35-36; A. Graboïs, 'Anselme, l'Ancien Testament et l'idée de croisade'; J. A. Brundage, 'St. Anselm, Ivo of Chartres, and the Ideology of the First Crusade' in *Spicilegium Beccense* II, Paris, 1984, pp. 161-173, 175-187. あるが，本稿は，これらとは多少とも異なる記述を試みる。

(3) *Ep.* 117, 66-71.

(4) "Placet ergo tandem utrisque ut carnis exercendae gratia Ierosolimam adeant, loca sancta orationum inuisant ut, agnitis locis incarnationis, passionis et ascensionis Dominicae dulciori

haec omnia memoria postmodum teneat. ...Perueniunt tandem ad Ierusalem terrestrem supernae patriae amatores. ...docente et amore Dei, Gundulfus et archidiaconus ex uoto monachatum cuncutie mundi delitiis praeferunt, et fiunt uoto promissione monachi, ...” *Vita Gundulfi*, 4, 1-8; 5, 11-14. テキストは，*The Life of Gundulf: Bishop of Rochester*, ed. R. Thomson, Toront, 1977に拠る。この時，ゴンドルフスに同行した助祭長（archidiaconus）は，ベック修道士となり，さらにルーアン大司教となるグイエルムス（Guillelmus, Gullaume Bonne-Ame）である。この伝記が書かれたのは，1114-24年頃であるが，ゴンドルフスが巡礼をした頃のパレスティナの状況について，“Occurrunt enim illis sicut eundo difficiles uinarum transitus, et ut tunc temporis erat, horrendas formidabant Sarracenorum insidias.”（*Ibid.*, 4.16-18）と述べ，サラセン人の恐怖について語っている。なお，アンセルムスとゴンドルフスについては，cf. 矢内義顕「アンセルムスとゴンドルフス⑴」『文化論集』19（2001）pp. 57-76.

⑸　修道院文学におけるエルサレムの意味については，cf. J. Leclercq, *L'amour des lettres et le désir de Dieu*, Paris, 1993[3], pp. 63-67. 本書の邦訳は，『修道院文化入門―学問への愛と神への希求』神崎忠明・矢内義顕訳（知泉書館）として，2004年９月に出版が予定されている。アンセルムスにおけるエルサレムの意味については，G. Olsen, ‘The Image of the first Community of Christians at Jersalem in the Time of Lanfranc and Anselm’ in *Spicilegium Beccense* II, Paris, 1984, pp. 341-53があるが，十分とは言えない。本書簡とアンセルムスの修道観については，cf. R. W. Southern, *Saint Anselm: Portrait and Landscape*, Cambridge, 1990, pp. 167-71また ‘visio pacis’ とアンセルムスの教会観が極めて修道院的（trés monastique）であることについては，cf. Y. Congar, ‘L'église chez saint Anselme’ in *Spicilegium Beccense* I, Paris, 1959, pp. 371-99 特に pp. 375-6.

⑹　Cf. *Anselmo d'Aosta: Arcivescivi di Canterbury Lettere*, Tom I, Curatori I. Biffi, C. Marabelli, Jaca Book, 1990, p. 240-1, n. 1.

⑺　*Ep.* 195, 20-25.

⑻　*Ep.* 410, 4-13.

⑼　“Suscipiendum autem in oratorio coram omnibus promittat de stabilitas sua et conversatione morum suorum et oboedientia, coram Deo et Sanctis eius, ut si aliquando aliter fecerit, ab eo se damnandum sciat quem inridit.” *Regula*, 58, 17-18. テキストは，*Die Benediktus-Regel*, Lateinish-Deutsch, Heuausgegeben von P. B. Steidle OSB, 1980[4], Beuron に拠る。

⑽　“Mox ergo in oratorio exuatur rebus propriis quibus vestitus est, et induatur rebus monasterii.” *ibid.*, 58, 26.

⑾　本書簡の全文は『カンタベリーのアンセルムス書簡37』矢内義顕訳として『中世思想原典集成10 修道院神学』編訳｜監修 矢内義顕（平凡社 1997年）pp. 59-67に収録。

⑿　*Ep.* 335, 26-28.

⒀　Mansi, *Sacrorum Conciliorum Nova Collectio*., XX, 815-820.

⒁　*Ep.* 261, 4-7. アンセルムスがフーゴーに宛てた書簡としては，この他に，*Ep.* 100, 109, 176, 208, 261, 389の６通が残されている。フーゴーからアンセルムスに宛てた書簡として，シュミットは，*Ep.* 390, 409の２通を収録している。この内，*Ep.* 409はフーゴー自身の書簡ではなく，彼の死（1106年）を告げる書簡である。シュミットは，この書簡を，本稿で取り上げている『書簡410』の前におく。本書簡でアンセルムスが，「ただし，神の教会を治め，人々を教化するために役立つことのできる聖職者は例外ですが…」（nisi aliqua persona religiosa, quae utilis esset ad regendam ecclesiam dei et ad docendum populum, ...）と述べた時，グレゴリウス改革の推進のために尽力した，今は亡き友人フーゴーを思い浮かべていたのかもしれない。なお，フーゴーのアンセルム

スへの影響については，cf. R. W. Southern, *op. cit.*, pp. 285-89.

⑮ *Regula*, 2, 2.

⑯ *Ibid.*, 2, 5-6; 5, 12 etc.

⑰ 11-12世紀のレコンキスタについては，cf. D.W. ローマックス『レコンキスタ―中世スペインの国土回復運動』林邦夫訳（刀水書房 1996年）pp. 35-152.

⑱ *Ibid.*, p.84-85.

⑲ *Lexikon des Mittelalters*, V, p. 166.

⑳ *Ep.* 188, 3-18.

㉑ Biffi, *op. cit.*, 223-224, n. 1.

㉒ *Ep.* 263, 3-15.

㉓ D. W. ローマックス *op. cit.*, p. 99.

㉔ Cf. *Ep.* 191, 192.

㉕ 中世においては，ムスリムをもっぱらサラセン人と呼ぶ。この点については，cf. 矢内義顕「ペトルス・ウェネラビリス『サラセン人の異端大要』」『文化論集』23（2003年）pp. 34-35, 44-45, n. 10.

㉖ *Vita Anselmi*, l. II, c. xxxiii. テキストは，*The Life of St Anselm, Archibishop of Canterbury by Eadmer*, ed. R. W. Southern, Oxford, 1962に拠る。

㉗ Cf. 高山博『中世地中海世界とシチリア王国』（東京大学出版会 1993年）p. 141.

㉘ “Quod petunt, non ut per rationem accedant, sed ut eorum quae credunt intellectu et contemplatione delectentur, et ut sint, quantum possunt, parati semper ad satisfactionem omni poscenti se rationem de ea quae in nobis est spe.” *Cu.* l. I, c, I.

㉙ “Quam quaestionem solent et infideles nobis simplicitatem Christianam quasi fatuam deridentes obicere, et fideles multi in corde versare: qua scilicet ratione vel necessitate deus homo factus sit, et morte sua, sicut credimus et confitemur, mundo vitam reddiderit, ...” *Cu.* l. I, c, I.

㉚ “Cum enim sic probes deum fieri hominem ex necessitate, ...non solum Iudaei sed etiam paganis sola ratione satisfaciat...” *Cu.* l. II, c. XXII

㉛ “Il nous semble toutefois que, dans la pensée d’Anselme, les Pagani représentent pultôt les Musulmans, qui n’étaient pas inconnus de l’Occident chrétien, et dont l’archvêque de Cantorbéry devait personnelllement faire la rencontre, lors de son premier excil en Italie.” R. Roques, *Pourquoi dieu s’est fait homme*, Paris 1963, pp. 72-73. この点については，cf. J. Gauss, ‘Anselm von Canterbury zur Begegnung und Auseinandersetzung der Religionen’, *Saeculum*, 1966, vol. 17, pp. 277-363 特に pp. 346以下，および同著者による ‘Die Auseinandersetzung mit Judentum und Islam bei Anselm’, *Analecta Anselmiana*, 1975, vol. 4: 2, pp. 101-109 また A. S. Abulafia, ‘St Anselm and those outside the Church’, in D. Loades and K. Walsh (eds), *Faith and Unity: Christian Political Experience*, Studies in Church History, Subsidia, 6, Oxford, Basil Blackwell, 1990, pp. 11-37および *Christians and Jews in the Twelfth-Century Renaissance*, London and New York, 1995, pp. 39-46. も参照のこと。ガウスの論文は，アンセルムスの護教論的・宣教的な側面を強調しすぎるように思われる。アブラフィアは，アンセルムスの使用する ‘infideles’ がユダヤ人を指すのでもなく，いわんやムスリムを指すのでもないとするが，これも無理のように思われる。詳しい検討はここでは省く。また，『神はなぜ人間となったか』を宗教間の対話という観点から，哲学的に検討したものとしては，cf. K. Kienzler, ‘Cur deus homo-aus der Sicht des mittelalterlichen jüdisch-christlichen Religionsgespräches’, in *Bonner Dogmatische Studien*, 27, 1997, Echter, pp. 122-140.

(32) 8世紀から11世紀までの，西欧世界のサラセン人の情報・知識に関しては，cf. J. Tolan, *Saracens: Islam in the Medieval European Imagination*, Columbia University Press, 2002, pp. 71-134.

(33) アンセルムスとイスラームに関して，気になる人物がいる。それは，ペトルス・アルフォンスィ（Petrus Alfonsi）である。彼は，イスラーム支配下のアンダルスでユダヤ人として生まれ，ユダヤ教の知識も深く，またアラビア科学についても高度な教育を受けていたが，1106年，アラゴン王アルフォンソ１世（在位1104-34年）の治世下に，王国の首都ウエスカ（Huesca）で洗礼を受け，キリスト教に改宗する。その後，イングランドに渡り，ヘンリー１世の侍医を勤める。さらに，彼は北フランスに渡り，天文学などのアラビア科学を教える。彼がイングランドに渡った時期は1106-16年のどこかであるとされている。もし，彼が1106-9年にイングランドに到着していたとするなら，晩年のアンセルムスと出会う機会があったかもしれない。しかし，それについては，いかなる証拠もない。彼の著作としては，改宗後に執筆された『ユダヤ人との対話』（*Dialogi contra Iudaeos, P. L.* 157, 527-672）があり，その「対話Ｖ」はイスラームを取り上げて論じ，この時代としては，イスラームに関する最も正確な情報を提供している。彼について詳しくは，cf. J. Tolan, *Petrus Alfonsi and his Medieval Readers*, University Press of Florida, 1993. アンセルムスの「理性のみ」（sola ratione）とアルフォンスィの方法に関しては，cf. *ibid.* pp. 13, 34-35.

(34) “Ego enim sum unicus frater vester...” *Ep.* 268, 183. 彼女の生涯については，詳らかではない。M. Rule, *The Life of St. Anselm*, London, 1883, vol. II, pp. 206-207は，想像力豊かに，次のように述べている。“Richera was very much younger than her brother; so much younger as to have grown up into girlhood and womanhood with the faintest possible remembrance of him, if indeed with any, and with no recollection at all of her mother. What became of the little creature at Ermenberg's death I cannot say; but I suspect that she was confided to the care of her maternal aunt, the wife of Count Gerard of Ensheim; and that Count Gerard took the place of father to the child when Gundulf, a year or two afterwards, died. Year followed year, and decade decade; Count Gerard of Ensheim was succeeded by his son; and when Richera was already in middle life she was married from her cousin's castle in Upper Alsace to a gentleman named Burgundius.” 古田暁「中世の女性像」（『図書』1979, 12. pp. 34-38）も情緒溢れる記述である。

アンセルムスがリケザとブルグンディウスに宛てた書簡は，*Ep.* 211, 258, 264，リケザのみに宛てた書簡は *Ep.* 268である。

(35) *Ep.* 264, 4-24.

(36) Cf. J. A. Brundage, *op. cit.*

(37) ジョルジュ・デュビュイー『ロマネスク芸術の時代』小佐井伸二訳（白水社 1983年）p. 68.

(38) ‘ordo’ について，詳しくは，cf. G. Constable, ‘The Order of Society’ in *Three Studies in Medieval Religious and Social Thought*, Cambridge, 1995, pp. 249-360. 11世紀については pp. 289-323，三区分の起源については，pp. 279-288.

(39) *Ep.* 235, 4-31.

(40) *Ep.* 82は1077/78年に執筆されている。イダ宛ての書簡は，この他に，*Ep.* 114, 131, 167, 244, 247がある。

(41) “Ad nullum enim pertinet vindictam facere, nisi ad illum qui dominus est omnium. Nam cum terrenae potestates hoc recte faciunt, ipse facit, a quo ad hoc ipsum sunt ordinatae.” *Cu*, l. I, c. XII.

(42) 「教会に役立とうとするのではなく，支配しようとする者が，神に敵対していることは明白です」（Qui ei volunt non tam prodesse quam dominari, procul dubio deo probantur adversari.）

Ep. 235, 22-23は，ベネディクトゥスの『戒律』の有名な一節「（修道院長は）人の上に立つよりも，人に仕えることを自覚しなければならない」（sciatque sibi oportere prodesse magis quam praeesse. *Regula*, 64, 8）を想起させる。

(43) Cf. R. W. Southern, *op. cit.*, ch. 12.

(44) "...vos velle ire Ierosolimam pro servitio dei et salute animae vestrae, ..." *Ep.* 264, 4-5.

(45) "It may perhaps be significant that a large namber of the husbands, sons and nephews of women to whom Anselm wrote did go on this crusade: Stephen of Blois, Robert Curthose, Eustace III of Boulogne, and his brothers Godfrey of Bouillon and Baldwin, Hugh of Vermandois and Robert coun of Flanders. Anselm's advice to Burgundius on the preparations he should make for his wife before his departure might well serve as a model of the advice Anselm had given to all the husbands of his spiritual daughters: ...", S. Vaughn, *St. Anselm and the Handmaidens of God: A Study of Anselm's Correspondence with Women*, Brepols, 2002, pp. 121-122.

(46) "Omnis voluntatis rationalis creaturae subiecta debet esse voluntati dei. ...Hoc est debitum quod debet angelus et homo deo, quod solvendo nullus peccat, et quod omnis qui non solvit peccat. Haec est iustitia sive rectitudo voluntatis, quae iustos facit sive rectos corde, id est volutate." *Cu.* l. I, c. XI.

(47) "Patere igitur ut verbis utar infidelium. Aequum enim est ut, cum nostrae fidei rationem studemus inquirere, ponam eorum obiectiones, qui nullatenus ad fidem eandem sine ratione volunt accedere. Quamvis enim illi ideo rationem quaerant, quia non credunt, nos vero, quia credimus: unum idemque tamen est quod quaerimus." *Cu.* l. I, c. III.

(48) ペトルス・アルフォンスィ（注31）の著作，またペトルス・ウェネラビリスの発案のもとで完成した，『ラテン語訳コーラン』を含む『トレド集成』（Corpus Toletanum）は宗教としてのイスラームに関する貴重な情報をもたらした。中世キリスト教のイスラーム理解については，cf. J. Tolan (2002) *op. cit.* および L. Hagemann, *Christentum contra Islam*, Darmstadt, 1999（L. ハーゲマン『キリスト教とイスラーム—対話への歩み』八巻和彦・矢内義顕訳 知泉書館 2002年）。

なお，11-12世紀に書かれたユダヤ教・イスラームに対する論駁・対話には以下のものがある。ギルベルトゥス・クリスピヌス（1045年頃-1117年）*Disputatio Iudei et Christiani. Disputatio Christiani cum Gentili.*（*The Works of Gilbert Crispin*, ed. A. S. Abulafia and G. R. Evans, Oxford, 1986). カンブレーのオド（1113年歿）*Disputatio contra Judeum Leonem nomine de adventu Christ.*（*P. L.*, 160, 1103-12). ノージャンのギベール（1055頃-1125年）*Tractatus de Incarnatione contra Iudeos.*（*P. L.*, 156, 489-528). *Dei gesta per Francos.*（*CCCM* 127A). ドイツのルペルトゥス（1076-1129年）*Anulus sive dialogus inter Christianum et Iudeum.*（M, L., Arduini, *Rupert di Deutz e la controversia tra Christiani ed Eberei nel secolo XII*, Roma, 1979, pp. 175-277). 偽シャンポーのギヨーム *Dialogus inter Christianum et Iudeum de fide Cathorica*,（P. L., 163, 1045-72). ペトルス・アベラルドゥス（1079-1142年）*Collationes sive inter Philosophum, Iudaeum et Christianum.*（*Peter Abelard Collationes*, ed. J. Marenbon and G. Orlandi, Oxford, 2000). ペトルス・ウェネラビリス（1092/94-1158年）*Adversus Iudeorum inveteratam duritatem.*（*CCCM* 58). *Summa totius haeresis saracenorum. Conta sectam saracenorum.*（*Petrus Venerabilis Schriften zum Islam*, ed. R. Glei, Alatenberg, 1985). このうち，偽シャンポーのギヨームとアベラルドゥスを除くと，著者はすべて修道士である。このことは，修道院神学の観想的・神秘主義的な性格を強調する J. ルクレール（*op. cit.*）が指摘しなかった点である。